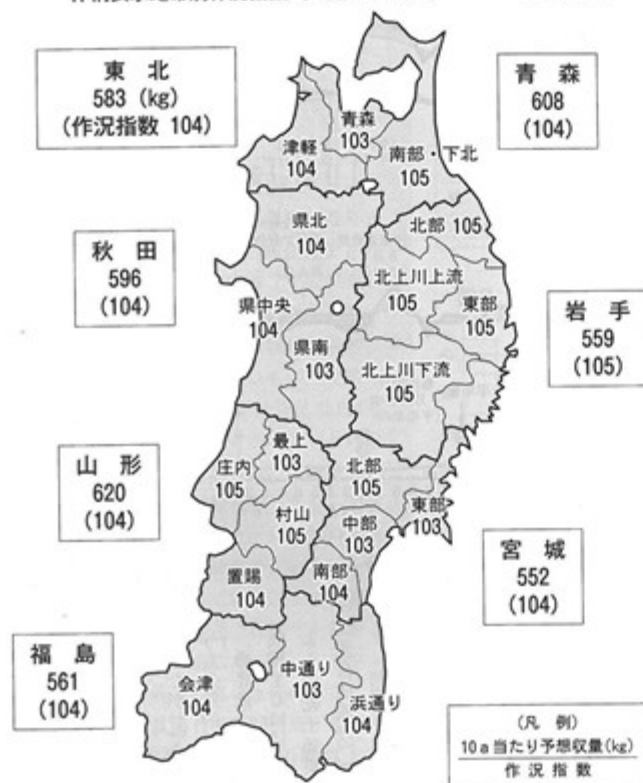


図1. 平成26年産米県別10a当たり予想収量、作況指数及び
作柄表示地帯別作況指数(9月15日現在) (東北農政局)



※作況指數と良否

多 少 (良否)	少ない (不良)	やや少ない (やや不良)	平年並み	やや多い (やや良)	多 い (良)
対平年比	94%以下	95～98%	99～101%	102～105%	106%以上

らない

健全多収の基本 有効茎数の確保

春4月から天候に恵まれ、これ

まだ体験した事のない乾土効果推定値であった。

20日頃（8葉期）までに有効基数が十分に確保された圃場が大方であった。

表1は、当社の稲株養生の「はえぬき圃場」の生育調査結果であ

 δ_c

3圃場共に最高分げつ期の茎数は植込み苗数の5〜6倍の茎数となっている。

取分け苗質が良好であつた訳でもない、ごく通常レベルの稚苗であつた事から考察しても、有効芽数確保までの天候に恵まれた証である。

庄内地域に作況指数105をもたらし、一番の要因は、穂数が十分に確保出来た為と思われる。

今一つ重要なのは、3圃場共に決して多植過ぎず、分けつによる莖数確保となっていることから、株が間張した健全なイナ型であった。

前述した事柄は、健全多収の基
本であることを再確認しておくこ
とが大切である。

これまでも詳しいほど申し述べて来たが、健苗を浅植えにして、尚保温的水管理等に留意し、初期生育の促進拡大に努めることが基本中の基本である。



十分な茎数確保で
豊作に!!

知って得するイナ作技術 **パートⅡ**

10

全国的には平年作の中

東北地方は「やや良」

農林水産省から発表された作況（9月15日現在）では、全国の予想収量は10a当たり、537kg（作況指数101の平年並）の見込みと出されている。

図1は東北の作柄表示地帯別作況指数である。

東北全体では予想単収583 kg
(作況指数104)のやや良とな

っている。

秋田・山形両県共にやや良の作柄であり、特に庄内は105となり、久々の上作となったようである。

因みに、山形県の単収620kgは都道府県別単収では全国1位となっているようである。

近年、地球温暖化の影響で登熟期に高温過ぎる事が品質と収量低下に繋がって来たが、今年は国2にもあるように、8月(出穂直後)

から雨天の日が多く、寡照で最高温度も近年では例がない程に低めで経過した事が、結果的にイネの登熟には良かったのか、品質、収量共に良好であったようである。

特に、昼夜の温度較差がつきにくい（夜温も下がらない）庄内地域が久し振りに最上地域等を上回って作況105となったようである。

イネの活力維持には日温較差、特に夜温が高過ぎない事が重要で

指導部長 松浦 一 宇

今年も又、日本列島のあちこちで洪水や土砂崩れなどの災害に見舞われた。イネづくりにおいても度重なる台風の襲来や、8月「登熟初期」の日照不足が心配されたが、全国的な作況指数100のものが、山形県、秋田県は、共に104の「やや良」となっているようである。結果が良ければ総て良しでははなく、何が好結果をもたらしたのか分析して次年度以降に繋げたいものである。

ある事を物語っているように思う
いずれにしても庄内・由利（日
本海に面した地域）には暑過ぎな
い夏が幸いしたようである。

実際に、イネづくりを数十年も体験して来た筆者は、暑い夏場にイネが夏バテしてしまい、内陸部のイネから負けてしまう悔しい思いを幾度となく体験している。近年の作柄が庄内で伸び悩んで来たのも、このような気象条件が大きく影響してきたように思われてな

「私、農家になりましたⅡ」

前号の良書紹介で「私、農家になりました」(誠文堂新光社)を紹介しましたが、その中で農林水産省の「平成25年新規就農者調査」も引用されていました。それによると、平成25年の新規就農者は50,810人で、ずいぶん多いものだと思っていました。全国の家族経営体は164万ですから約3%に後継者がいることになり、30年で世代交代とすると後継者問題は生じないことになったかと思っただけです。

庄内の集落で考えると、戸数30戸の集落で毎年1人の新規就農者がいることになるのですが、集落に30代以下の後継者がいないのが極く普通の状態であるなどと思い巡らしていました。

ところが、前述の農林水産統計をよく読むと、新規就農者の年齢構成が書いてあり、新規就農者のうち60歳以上が26,780人で半数以上を占めていました。もちろん60歳以上の人はトラクターに乗ることができ即戦力になりうるのですが、残念ながら平均10年位しか働けませんから、あまり期待されても困る話です。

以上の新規就農者数を山形県に置き換えると、農家数5.3万戸に対して新規就農者264人で約0.5%にしかありません。農業界を自負する以上、危機的な状況といわなければなりません。新規就農者の調査は個人情報の点からも難しい点があり「私、農家になりました」と届出する訳でもなく、関係機関からの聞き取りの調査には限界があると思われまふ。

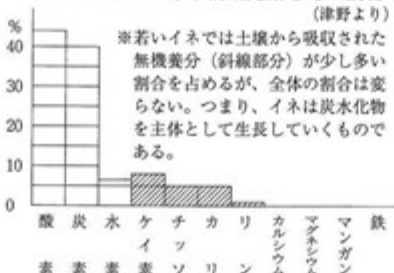
白貝楽水

表1. 植込み苗数と最高分げつ茎数
及び穂数と予想収量
「品種・はえぬき」

(平成26年度第14次稲作調査より抜粋・松浦作表)

項目	調査区	ア	イ	ウ
植込み苗数(本/㎡)		110本	114本	122本
最高分げつ茎(本/㎡)		600本	599本	654本
分げつ倍率(倍)		6.45倍	5.25倍	5.36倍
穂数(本/㎡)		521本	474本	519本
予想収量(kg/10a)		723kg	718kg	671kg

図3. イネのおもな構成元素とその割合
(津野より)

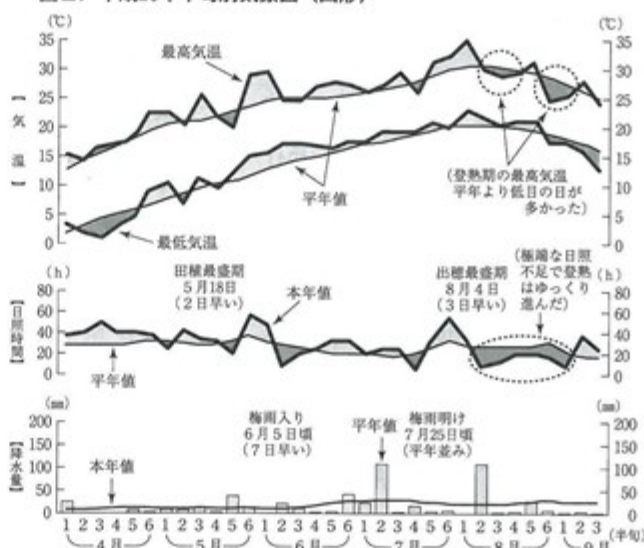


にあるのではなく、互いに結合しあって化合物をつくっている。その内、炭素、水素、酸素でできた化合物が炭水化物と呼ばれており、炭水化物で乾物全体のほぼ90%を占めているのである。

イネの生長(乾物重の増加)にもっとも必要な因子は、植物体の構成割合からみて、炭水化物である。炭水化物は光合成作用により生産されるものであるから、イネづくりの考え方の中心に光合成作用をドカッとすべきである。少し理屈っぽくて、難しい話になったが、要は、必要最小限の経費で所得に繋がるイネづくりとすることである。

(次号に続く)

図2. 平成26年平年別気象図(山形)



資料: 山形地方気象台

注: 1 田植期及び出穂期の最盛期は、県平均の期日である。

2 () 内の日数の運達は、対平年差である。

次年度に向けた イネづくりの考え方

収穫直後から次年度に向けたイネづくりは始まっている。生ワラの腐植促進の為に秋耕や

腐植促進資材の投与、田面の高低ならし、水路や畦畔からの漏水箇所の修理、弾丸暗渠施工による透水性の向上等々、沢山の作業がある。しかし、生産費割れするような低米価では余計な出費は出来ない

状況になっていることから、最少の経費と労力で最大の効果を上げる、これまでに以上に厳しい少費省力イネづくりであらねばならない。

したがって、土づくり資材の投与も必然的に控えざるを得ない。必要最小限の経費で少しでも多収穫するには、自然の力(今年の様な乾土効果等)とイネの力(光合成能力)等を存分に引き出す(利用する)ことが重要である。

イネの生理・生態を理解し 質素なイネづくりを

養分吸収を基礎としたイネづくりの考え方は合理的であり、イネの生長に合わせて、また、倒伏等しないので健全に多収に結びつくように窒素、リン酸、カリを中心、基肥、穂肥と言ったように時期と分量を慎重にきめて施用する技術が確立されて現在に至っている。イネの生長に必要な要素を無機養分に限定したからであって、イ

ネのからだを構成している成分を大まかに分ければ、水と水以外のものとなる。水分をとり去った残りのものを乾物と呼んでいるのである。

図3は、乾物の中身をさらに元素にまで分析して、乾物重に対するパーセントで示したものである。いちばん多い元素は炭素であり、つぎに多いのは酸素、さらにケイ素、水素、窒素、カリ、リンの順である。これらの元素はバラバラ

100%天然有機リン酸肥料

マドラグア

MADURA MADURA GUANO TA GUANO

【リン成分22%・石灰成分30%
ケイ成分8%以上保証】

マドラウイング株式会社

水戸市鯉町4212-60
TEL: 029-259-7491
FAX: 029-259-7492